

# 保 育 入 門 (七)

倉 橋 惣 三

## 六、幼稚園教育と設備(下)

元來、設備といへば如何にも固定的なもの、様

三  
幼稚園の設備の中には、恒定性のものと、易動性のものとある。前に述べた處の遊園、部屋分け等大きい建築に屬するものは、即ち前者であつて、初めの設計に於て深い注意を要することは勿論であるが、その後容易に變更することの出来難いものである。従つて場合によつては不完全と氣がついても其のまゝにつゞけて居なければならぬことが屢々ある。之れに對して易動的な設備、すなはち教具とか器具とか装具とかいふものは、一度び造つたら、教育上悪い點を氣づいても従來のまゝに襲用しなければならぬといふものではない。又少しの研究、少しの考案によつて、それを改良もし活用もすることが必ずしも困難でない。

な感じのみ伴ふものであるが、實は活きたものでなければならぬ。殊に易動性の設備に至つては保姆の心のまゝに従つて、生きて働く——生命を持つたものでなければならぬ。而して、その生命を以て幼兒の生活を支配してゆくものでなければならぬのである。然るに多くの場合、此の活用が頓と怠れられて居る觀がある。假令ば、幾年も々々も、机は同じ排べ方に釘づけせられ、額は年々に色があせてゆく他一度も掛け替へられるとなく、飾棚の中には光澤のとれた、剝裂や標本が居睡つて居る——と言つた風の保育室では、設備は何の生命をも有して居ない。何等活きた働きをなさないのでみならず、沈滞した、魯鈍なる空氣を以

て、却つて幼児に消極的な影響を及ぼすだけである。幼児教育に最も必要なる清新の氣が、斯かる設備によつて、到底得らるべきではない。而して此の責任は一つに保母の不精に屬すると言つてよい。

幼稚園教育者は小學校教育者の如く、明日の教案に就て、多くの時間を費す程の準備を要するものではない。しかしながら、其の日々々々が濟めばよいといふものでないことは勿論である。頭の中では絶えず次の保育の計畫をして居なければならぬ。その中でも、設備に就ての考案を怠つてはならない。あの机を斯う排べて見ようか。或は明日は一つ机を皆出して椅子だけにして見ようか。或は飾棚をあつちの隅へ移して見ようか。あの額の繪をあれと取り替へようか。或はあの小さい額を皆はづして、大きいのを一つに替へて見ようか。あの花瓶をかへよう。あの置物をかへよう。季節により、月により、乃至日により、殊に保育上の

目的により、随分細かく意を用ゐなければならぬのである。

而して、その用意の準據となるものは何か。要するに前述幼稚園教育の四原則を完ふするに他ならぬのであつて、幼児の自發生活を促進する様に出來得る限り相互的になれ得る様に、その生活のなるべく具體的なる様に、よき情緒的習慣を養ひ得る様にといふに他ならぬ。蓋し此の四原則は、設備そのよろしきを得れば自らに完ふし得らるゝもので、又設備の力を俟たずしては、眞によく之れを實現し得るものではない。

#### 四

幼稚園の設備は、之れによつて教育を行はれ易からしめるのみでなく、設備自身が大いなる教育力を有して居るものである。蓋し、人を取り圍んで居る總ての環境は、必ず何等かの影響を其の人に及ぼすものであつて、之れを廣く『環境の感化』と名づくるが、幼児の精神は殊にその環境の感化

を破り易い状態にあるものである。明るい室に入れば快活になる。暗い室に入れば陰気になる。細緻精巧を極めた繊弱なる外圍の内であれば、心自ら小弱となり、堅牢豪壯の外圍の内であれば、氣自ら強健となる。所謂居は氣を移すといふことが幼児に於て最も著しいのである。

設備をして秩序正しからしめよ。幼児の生活は自ら秩序正しくなつて來る。設備をして清潔ならしめよ。幼児は自ら清潔を好まざるを得なくなる。高尚も、下品も、優美も粗野も、之れを口に説いて幼児を感化することは容易の業でない。しかも、設備の與へる陶冶力は、比較的容易に其の目的を達し得るのである。

幼稚園の設備を視て、其の保姆の人柄風尙の全體を察することが出來、又其の設備の間に行はれて居る幼児の教育状態が略ぼ察することが出来る。之れ程設備は幼稚園教育にとつて重要なものである。

## 五

幼稚園の設備に就て、すべてを通じて最も綿密に意を用ゐらるべきは衛生上の顧慮である。

(一)、室内は日光の豊富と換氣の完全とを以て必須の條件とする。又塵埃の豫防も大に用意せらるべきことである。殊に冬季、窓障子が密閉せらるゝ時には、完全なる換氣設備の要求が一層多くなる、ストーブ、火鉢等による暖室法を用ふる場合に於ては尙更のことである。換氣設備のない人工暖室法は寧ろ一種の冒險と言つてよい位のものである。

日光の豊富といふことは、室内のあかるさを増すといふこと、日光による自然的消毒作用を充分ならしめるといふこと、此の二つの意味に於て深く意を用ゐられなければならない。勿論日光直射の硝子窓に日覆を用ゐないで、其の附近の幼児の頭部を熱せしめる如き極端な不注意は心すべきことであるが、幼児に直射しない限り、日光は

充分さし入る様にしなければならぬ。

總ての室及び廊下の床に就ては、常に清潔に洒掃が行き届いて居ることは勿論、塵埃の浮動することの少ない様に設備せられなければならない。之れは幼児の穿きもの、關係もあるが、設備の方から第一に注意しなければならぬ。塵埃に關しては、椅子の蒲團なども深く意を用ひらるべき必要がある。

(二)、すべての器具に就ては、病毒傳染の豫防に最も細心なるを要する。殊に共同使用品に就ては一層深く氣をつけなければならぬ。現今の幼

## 七、幼稚園教育の方法

### 第一、其の基本——自發遊戯

幼稚園教育法の研究は、要するに幼稚園教育の四原則を如何にして最よく發揮せしめんかの研究である。小學校其他の教育に於けるが如く、與ふべき教科教材が國家的社會的に規定せられてあつ

幼稚園に於て共同の手拭を用ゐさせる様の處は全然無いと思ふのであるが、共同の湯呑茶碗はまだ可なり行はれて居る。而して之れが幼児にとつて恐ろしいデフテリー菌の傳染等にとの位危険のことであるかは一寸考へればすぐ分ることである。

現今幼稚園に對する批難の中、衛生上の危険といふ點は、最も重大なることであつて、多人數集合する處には多少の危険を免れないと言へばそれ迄であるが、出來る限りの豫防設備は是非肝要のことである。

て、如何にして之を教授せんかとする研究とは、全然趣を異にするものである。換言すれば幼児をして如何に充分に且つ正當に生活せしめんかといふ問題に他ならぬ。之れ以下であつてもならぬ。亦

之れ以上であつてもならぬ。而して、幼児の生活を眞に自發的ならしめ、相互的ならしめ、具體的ならしめ、習慣的ならしむるもの、遊戯に如くものではない、幼稚園教育法の基本は實に遊戯であらざるを得ないのである。

一

遊戯が兒童の自發生活であることは多くいふまでもない。今日の學說に於て、兒童の諸精神活動が其の目的の意識なく、その活動のために活動するものが即ち遊戯であつて、他から餘儀なくせらるゝのでは勿論なく、又自ら他の目的の手段としていもなく、純自發的に營まるゝ所の生活である。而して、その精神活動の中には、極めて簡單なる感覺活動もあり、衝動活動もあり、又複雑なる情緒的活動及び知的活動もある。従つて其の種類も多く範圍も廣いものであるが、兒童殊に幼兒に於ては、之等の精神活動が直接現實の生活に使用せらるゝ必要と機會とが未だ少ない。しかも、活潑

なる自學性は無智に閉塞せられて居るには堪へない。即ち絶えず活動する。之れが幼兒の遊戯の廣きに亘り。且つ強い所以なのである。

古い考へでは、此の自發的の遊戯に深い意味を見出すことを知らなかつた。そのために、遊戯と教育とは或る意味に於て敵同志の様にさへ考へられて、教育者の遊戯に對する態度は、多くは如何にして之れを禁止しようかといふにあつた。たかく娛樂による精神の感勞位のことには考へるだけであつた。『よく遊びよく學べ』と言ふ格言は、よく學ぶためによく遊ぶことの價値を認めたもので、『よく遊ぶ』といふこと自身に對して、充分その價値を認めて居なかつた。しかし、自然が兒童に自發的遊戯を興へたことは、左様な消積的の意味のみではなくして、幼兒生活に對し大に積極的の意味を有して居ることである。試みに問ふ、若し子供が遊ばなかつたらどうであらう。感覺も運動も衝動も高等精神活動も、それが直接現實の生活に

用のある迄、何の活動をもすることがなかつたら  
どうであらう。茲に於て、遊戯は單に自發的であ  
るといふのみならず、自然的に幼兒を教育する所  
のものであると言へるのである。之れによつて其  
の感覺が練習せられる。衝動が教化せられる。情  
性が陶冶せられ知性が練磨せられる。之れ幼兒の  
遊戯はたゞに自發的生活であるのみでなく、自己  
教育の生活である所以である。

教育といふことになる。と結果の豫想が伴ふ。し  
かし、自發生活には結果の意識はない。この點が  
自己教育としての幼兒の遊戯の深く考へらるべき  
點であつて、また陥り易き誤りである。彼の往々  
にして行はるゝ遊戯の課業化は、すなはち此の誤  
りの例である。勿論、課業化せられたる遊戯――  
普通に幼稚園教科として考へられて居る所謂共同  
遊戯――にも、或る教育的價值を(身體及び精神の  
操練として)有しないものではない。しかも、茲  
にいふ、幼稚園教育法の基本としての遊戯は、も

つと自由な、もつと廣い意味のものである。

元來、自發的遊戯の眞面目は二つの特質に歸し  
得るものである。其の一つは『結果の意識から離  
れたる自由』といふことであつて、前に述べた通  
りである。第二の特質は、此の第一の特質から當  
然生じて來る所の『結果によらず活動それ自身よ  
り生ずる快感』である。簡單にいへば、強ひられ  
て居るといふ感じなく、而して常に愉快でなくて  
はならない、若し此の二つの特質に於て他少とも  
反する所あり缺くる所があつたならば、それは自  
發的遊戯の本質を失つたものであり、従つて、自  
己教育の本性を完ふしないものである。

## 二

遊戯は勿論單獨であることもある。しかし、幼  
稚園に於ける相互中心生活を、最もよく行はれ得  
しむるものである。遊戯の形式は多様であるから、  
一人が大将となつて他は之れに従屬することもあ  
る。一人がお姫様となつて他は之れに奉仕するこ

ともある。しかも、其の從屬者も奉仕者も、自發的遊戯の愉快を味ふこと、大將、お姫様と何等の違ひもないのであつて、形式上其の遊戯の中心人物が誰れであるにしても、互を樂ます關係に於ては、全く相互的である。況んや、遊戯上の役目が平等である場合に於ては、明かに相互中心的である。換言すれば、己れ等以外の第三者を中心として樂ませて貰つて居るのではない。但し、自發遊戯に保姆が加つてはよくないといふのではない。

保姆も亦相互中心の相互の中に加はればよいのである。而して、自發遊戯が其の眞面目を發揮して、自發的遊戯としての愉快の沸騰點に達する時には、此のことが自ら容易に行はれるのである。若し何時迄たつても保姆が中心として幼兒達に意識せられてのみ居るならば、幼兒の自發性に缺陷があるが、保姆の方に誤があるか、孰れにしても自發遊戯として不自然なることである。而して、幼兒の自發性に缺陷のあるべき筈がないとすれば、責任

は保姆にある。幼稚園教育の原則を充分理解して居ない結果と言はざるを得ない。

最も教育的に遊ばせる保姆は、幼兒達をして幼兒達で遊ばせる人である。そこまでの誘導はしないでなければならない。しかし、それ以上尙ほ自分が遊ばせなければならぬのは、下手な子守のするお相手である。遊戯の研究の熱心家に往々此の苦心の缺けて居る人がある。

### 三

詩人シルレルの言に『人は遊べる時最完し』といふ句がある。幼兒遊戯に於ても、其の全生活が最も具體的に行はれる。遊戯の分類をなさんとする場合には、その遊戯に於て活動する主なる精神活動の一つを擧げて、或は感覺的遊戯とか情性的遊戯とか意志的遊戯とか、更に之れを細別して、視覺遊戯、聽覺遊戯などの名稱が用ゐらるゝこともある。しかし、之れ研究上、兒童の生活を抽象分解した上で、遊べる子供そのもの、生活

は、そんな離れぐゝのものでは決してない。例へば一つの色紙を持つて遊んで居る時に、決して色の感覚だけが活動して居るのではない。競走をして居るとき、足の運動だけが活動して居るのではない。勿論遊戯によつて多少其の活動の範圍割合を異にすることはあるも、要するに全我の活動であるといつてよい。遊戯が熱心に樂まれて、自發的遊戯の眞面目を發揮すればする程、此の具體的たることを加へるのである。而してこれは、課業に於て、體操に於て望み難いことである。實に遊戯程常に幼兒の生活の全體を活動せしめるものはない。

尙ほ又、具體的といふことの第二の意味たる、實際生活との接近といふことも、遊戯に於て充分得ることが出来る。といふよりも、遊戯が即ち幼兒の實際生活に他ならぬのである。少くも最も眞實切實なる實際生活なのである。多くの人々は、遊び方、遊ばせ方に就て、甚しく苦心する。しか

も、最もよき遊び方を知つて居るものは幼兒自らである。他より教へる時、往々にして形になり假りになる。自分で遊ぶ時、實に生命ある實際である。

一體に幼兒の遊戯が、成人の餘戲娛樂と同じく、軽い意味のたはむれごとくに考へられて居ることのあるのは、非常なる誤解である。遊戯は幼兒にとつては、實に一生懸命である。本眞劍である。心理學上は遊戯を以て生活の準備的練習であると説明するけれども、遊ぶ當人にとつては決して稽古ではない。假作ではない。芝居ではない。遊戯の教育的價値の主要なる一點が實に是に存するのである。若し幼兒が稽古の様な張の少ない心を以て遊ぶものならば、又假作の様な餘裕ある心を以て遊ぶものならば、又芝居の如き、傍觀者の鑑賞を念として遊ぶものならば、遊戯の教育的價値は餘程強度の弱いものになる。それ等も亦或種の價値を有することもあるかも知れないけれども、幼稚



園教育法の基本として要求する自發遊戯は、もつと眞面目な、眞剣なものでなければならぬのである。而して眞によく遊ぶ時此の條件は自ら完うせられるのである。

#### 四

習慣的といふこと、殊に情緒的習慣を養ふといふことは、換言すれば概念的にしない、理屈的にしないといふことに他ならぬ。更に言ひ換ゆれば、日常の生活から、理外の領會、言外の説明として、無意識的に、いはゞ不用意の間に浸み込むといふことに他ならぬ。自發的にして、相互的にして、具體的なる遊戯は、實に此の條件を完備するものである。勇しい遊び、優しい遊び、快活な遊び、それは皆、幼兒の全人格へ勇しさ、優しさ、快活さを浸み込ませるものである。

殊に幼時の遊びの相手から、いつとなく受ける情緒上の感化は、刹那的に強い覺醒や、瞑想の理に解けて來る理解や、さういふものに比較して淡

く、かすかなものであるけれども、度を重ねて濃く、後に至つて懷想して意外に顯著なるものである、即ち、情緒的基調の底深い一底流をなすものである。

#### 五

遊戯は斯くの如く、幼稚園教育の四原則を完全に發揮し得るものであるが、幼稚園教育の願慮に就ては、何といふに、之れ亦、最も完全に其の條件を具ふるものである。

(一)、身○體○の○健○全○な○る○發○達○、に遊戯の適切なるは言を俟たない。勿論遊戯の場所、設備に關する注意が不完全である場合には、身體の健康上必ずしも望ましからぬ如きことがないとも限らない。しかし、それは設備の缺點で遊戯そのもの、弊ではない。假りに理想的なる遊園があつて、其處で充分自發的な遊戯を樂ますとすれば、此の位健康上有益なることがあらうか。又必ずしも完全に理想的でないにしても、戶外に於ける遊戯は此の點

から最も奨励せらるべきことである。

(二)、神経系統の養護、に關する第一の注意は要するに神経の過度の疲勞を避くことにある。而して、遊戯は其の自發性に基いて、決して無理とか過度とかいふ疲勞を神經に與ふるものでない。愉快の消滅は常に最よき疲勞の合圖を與ふるものであつて、それが自發的である限り、適當に中止せらるゝなり、他の遊戯に轉換せらるゝなりする。恐るべき神經疲勞の弊の如きは決してないのである。たゞ、設備の不完全よりして、空氣の不良等より生ずる過勞は別問題であるが、よく注意せられなければならない。

(三)、個性の保存、遊戯は自發である。自己の遊戯である。模倣することはあつても、自己の嗜好に基いて模倣するのである。此位よく個性の保存の行はるゝものがあらうか。遊戯によつて、其の幼兒の個性を觀察することが出来る位である。集團教授等の課業に於て、常に完全に個性を保存

するといふことは、實に容易になし難いことである。しかも、遊戯に於ては、おのづからにそれが行はれる。

\* \* \* \*

人或は言ふかも知れない。しからば幼稚園に於ては只放任して自由なる遊戯をのみなさしむべきか。殊に論は論として、實際上自由のみ任せ難きことが屢々あると。答へて言ふ。遊戯のみが幼稚園教育といふのではない。之れは幼稚園教育の方法の基本なりといふのである。次に、自發遊戯即ち放任ではないことは前に述べた(第二『幼兒の教育』の二通りである。而して、其の誘導は二つの方面よりせられる。一つは設備によつてある。一つは遊具によつてある。設備に關しては前に述べた。遊具に就て次に述べなければならぬ。